



どう話す?

超音波検査に写っている2Dの胎児の画像を母親（あるいは両親）と一緒にみる場合、母親や両親は胎児が普通の写真で撮った肖像のように描出されていると考えています。そのため最初に**胎児の断面がみえているということ**を説明しておかないと、何が写っているのか理解できないことが多いのです。たとえば頭殿長をみせる場合、胎児の頭からお尻までみえているのに、なぜ手足が写っていないのかと疑問に思う人もいます。

そこでまず「この検査は胎児の断面をみる検査です。ですから通常の写真とは違って、顔と手足と一緒に写ったりはしません」というような説明から始めることも必要です。大横径の断面をみせるならば、自分の頭を指さしながら、大横径の断面について説明することもよいでしょう。なかなか理解してもらえない場合は、3Dの画像を見せてあげればより親切でしょうね。

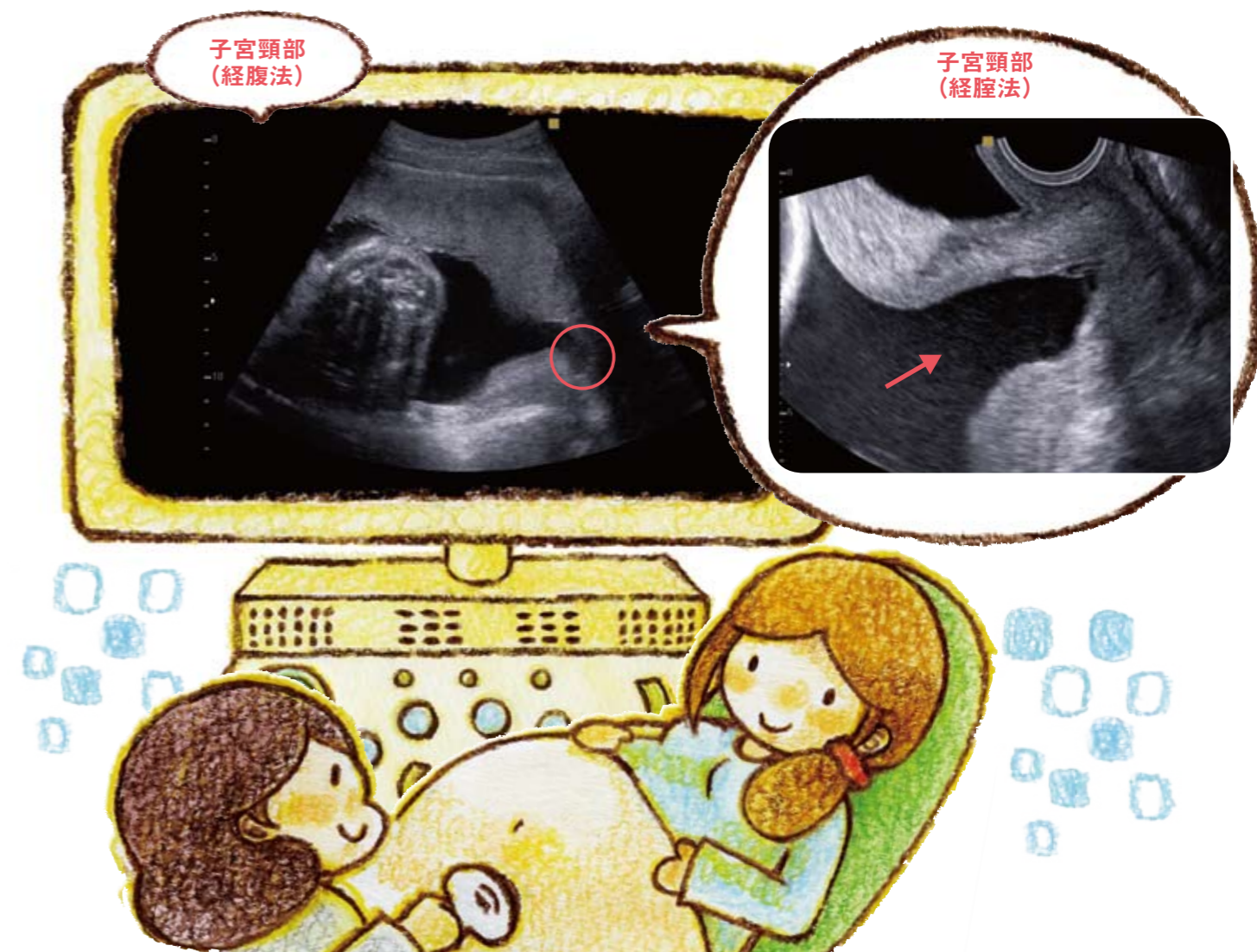


図4 経腹法と経膣法の比較（子宮頸部）

妊娠23週の切迫早産。経腹法ではうまく描出できない子宮頸部（丸で囲んだ部分）を経膣法で見ると、内子宮口は開大していることがわかります（右図矢印）。

どう使う?

さて、今回は経腹法をやってみましょう。さっそくプローブを手にとってください。本文でも述べたように、プローブは握りしめるのではなく、手首が自由に動かせるようにつかみます。プローブが母親と接する部分に十分な量のゼリーを塗布します。それから妊婦さんの腹壁にプローブを置きますが、最初は恥骨の上方あたりにプローブを置いてみましょう。妊娠初期であれば、そこに子宮があるはずですし、妊娠中期以降なら胎児の頭や手足や臀部が写っているでしょう。プローブは妊婦さんの腹壁にそっと触れているくらいに、自分で支えることが大事です。プローブを押しつけると、妊婦さんが不快だけでなく、胎児など対象の画像を歪ませてしまいます。

今回はここまで。次回は妊娠初期の検査について解説します。